

市町村指定文化財取材票 《表》

取材日	2024年	7月	2日	(記入者) 井本正美(表)
取材参加者	石井	井本	西田	井本正美(裏①)
	宮本	本井	横山	石井宏子(裏②)
取材対象先	奈良市：西大寺の 木造大黒天坐像 護摩堂・鐘楼			

所在地	奈良市西大寺芝町1丁目1-5		
所有者(取材 対応者)名	所有者：西大寺 酒部浩明師(個人情報守秘)		連絡先
			PCアドレス
取材申込	申込先・行政名など：西大寺 酒部浩明師(富雄 根聖院住職)		
市町村 指定文化財	彫刻 1 軀	木造大黒天坐像	2010(平成22)年3月4日指定
	建造物 2 棟	西大寺護摩堂・鐘楼	1988(昭和63)年3月3日指定
文化財指定理由	<p>木造大黒天坐像は、1504(永正元)年海龍王寺沙弥仙算と木寄番匠七郎太郎の作と言われ、南都の室町時代の造仏活動を知る上で歴史的価値の高い仏像である。</p> <p>護摩堂は平面方三間で右側面中央は正面と同じ棧唐戸、左側は引き違い戸とし、縁は正面と左右に設けている。当初から左右の戸構えが異なる建物。小規模ながら上質の建物で棟札から1624(寛永元)年の建立であることが分かる。</p> <p>鐘楼は幕末または明治の初めに、摂津の多田院から移築された。全体の姿から細部までよく整った質の高い貴重な建物である。</p>		

文化財の状況

防火対策	設備・対策・点検・通知方法など	記入者の感想
	(西大寺全体として)国宝・重文等寺宝を数多 所有するので放水銃はじめ火災報知器等、法 律に則った管理を行っている旨説明があった 。	きっちりと管理されていると思っ た。
獣害対策	被害の有無、対策など	記入者の感想
	境内に小動物は入り込んでいる可能性あり。建物 等に傷はないので獣害はないと説明があった。	街中なので心配はないと思われる 。
保存～継承 へ 苦労と 今後の課題 と対策	<p>末寺を含む86ヶ寺に及ぶ寺を抱える真言律宗総本山として今後については、 厳しい目で見据えておられる。現在も各僧が分担して末寺のお世話をしてお られる状況を知った。少子高齢化が進み、20数年先の消滅市町村名の発表も あり、このままでは末寺の3分の1は消滅すると危機感をお持ちである。国民 挙げての文化財に対する意識改革が喫緊の課題ではないかと思った。</p>	

取材を終えて感じた文化財保護状況と今後の課題(修復、維持、管理、環境など)

創建は奈良時代764(天平宝字8)年に孝謙(称徳)天皇が鎮護国家と平和祈願のため7尺の金銅四天王像の造立を発願されたことに始まる。広大な境内に百数十寺の堂舎が藎を並べていた官寺である。平安時代に再三の災害にあい大伽藍も衰頽した。鎌倉時代に稀代の名僧興正菩薩叡尊の尽力により伽藍は整備された。現在の西大寺はほぼこの頃の姿を伝え、真言律宗総本山として数多の寺宝や宗教的行事に寺格と由緒を偲ぶことができる。一方多数の国宝・重文他、寺宝等管理のご苦労また境内維持管理の膨大な費用等は殆どが寺負担であり、なかなか思うに任せないとお聞きした。南都七大寺の一つ西大寺、1300年の歴史ある大寺ですらクラウドファンディング等諸手法で資金確保しなければならない現実にもどかしさを覚えた。

市町村指定文化財取材票《裏》①

取材日	2024年	7月	2日	(記入者) 井本正美	
取材参加者	石井	井本	西田	宮本	本井
	横山				
取材対象先	奈良市：西大寺の 木造大黒天坐像 護摩堂・鐘楼				

《大黒天坐像の画像使用許可済・建物等写真撮影許可済》

文化財指定名 木造大黒天坐像

大黒天坐像(西大寺所蔵)	大黒堂正面
 <div data-bbox="204 1167 703 1305" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>沙弥仙算の現存最古の大黒天坐像 木造 像高64.2cm</p> </div>	 <div data-bbox="813 779 1257 835" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>中央に大黒天坐像を奉る</p> </div> <div data-bbox="858 891 1190 925" style="text-align: center;"> <p>大黒堂の南東に立つ菩提樹</p> </div>  <div data-bbox="1078 981 1329 1357" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>興正菩薩叡尊お手植えの菩提樹 (樹齢約700年)</p> <p>果実「菩提子」は数珠玉にして、お念珠として販売されている</p> </div>
文化財の由緒などを記入	所有社寺や地域（廃寺等）の歴史や特徴を記入
<p>西大寺大黒天坐像は、大黒堂中央に奉られている。左足を踏み下げて坐る姿で古式の大黒天の伝統を踏襲している。顔はふくよかで温厚。塊(かい)量感に富み、衣文も大ぶりで個性的な表現をしている。銘文から1504(永正元)年海龍王寺沙弥仙算、木寄番匠奈良宿院七郎太郎の作と分かる。南都の造仏は仙算や東大寺法師実清等仏像制作に長じた僧が大きな役割を果たした。彼らの下で宿院町に住んだ番匠が彫刻技術を習得しながら代を重ね、天文年間の半ば頃、宿院仏師として自立にいたる。その早期の作で歴史的価値の高い仏像である。</p>	<p>西大寺は2つの歴史を持つ。称徳天皇による鎮護国家と平和祈願のため発願されたことに始まる。約480haの境内に東の東大寺、西の西大寺にふさわしい官寺であったが平安時代に再三の災害で衰頹してしまう。鎌倉時代に興正菩薩叡尊は、真言律宗根本道場として伽藍を整備。同時におろそかになっていた戒律の教えを最も尊重し、精力的に行動に移した。室町時代にも兵火等で多くの堂塔を失うが、叡尊以来の法燈は連綿と続き現在は真言律宗総本山である。尚、大黒堂は元塔頭の三光院の本堂であったと伝える。現在は愛染堂の北東に移築されている。</p>

市町村指定文化財取材票《裏》②

取材日	2024年	7月	2日	(記入者) 石井 宏子	
取材参加者	石井	井本	西田	宮本	本井
	横山				
取材対象先	奈良市：西大寺の 木造大黒天坐像 護摩堂・鐘楼				

《写真撮影許可済》

文化財指定名：西大寺護摩堂・鐘楼

護摩堂 (全体写真)	護摩堂 (説明板と室内の煙り出し)
	

鐘楼 (東から全体)

(三手先組物・墓股)

(西側から全体・板扉)

		
--	--	--

護摩堂の由緒など

西大寺は室町期・1502(文亀2)年5月に「兵火により西大寺一山焼亡し、四王堂・中門・石塔院・地藏堂・東大門のみ焼け残った」という悲運に遭い、ほぼその状態で江戸時代を迎えるが、江戸時代中期に、ようやく西大寺諸堂が建立に至ったとのこと。護摩堂はその復興の早い時期、1624(寛永元)年に建立された。木造寄棟、3間×3間の建物で、愛染堂、鐘楼の北に建立されていたが、1979(昭和54)年現在地に移設。当初から左右の構えが異なる建物。本尊は宝山寺湛海律師作の不動明王坐像。

鐘楼の由緒など

鐘楼は軒下や縁の下に三手先組物を用いた建物で、寛文年間(1661-1673)の造営と思われる。川西市の多田院(清和源氏の本拠地にある源氏一門の祖廟。江戸期に、徳川家綱・綱吉の支援を受け復興された神社)より幕末か明治初めに移設された。三間二間、袴腰(天守台のように下の広がった部分)をつけた入母屋造、本瓦葺。下層西側に板扉の入り口がある。上階の柱間は解放になっているが、当初は連子窓や扉も付いていたと思われる。内部には、1645(正保2)年の銘を持つ鐘がある。